

第一次世界大戦下の ある知識人の日記 — 波多野培根と大戦報道 —

赤司 友徳

はじめに

本稿は西南学院で約二十年にわたって教員を務めた波多野培根¹の日記²から第一次世界大戦期の記述を紹介しながら、波多野がこの大戦についてどのような情報に接し、どのように思索したのか、さらに大戦報道を契機にどういったかたちで波多野の知的関心が広がったのかを明らかにしたい。

さて、2014年は第一次世界大戦開戦100年ということもあり、国内外で様々な研究・学会活動や展示会が行われた³。日独戦争を除いて直接的な関わりが薄いと思われていた第一次世界大戦は長いあいだ研究史から取り残されていたが、実はこの大戦

-
- 1 波多野培根（はたのますね 1868-1945）は津和野藩士かつ漢学者であった波多野達枝（みちえ）の長男として生まれ、16歳で岩国の陽明学者東沢瀉の塾に入門した。1885年同志社英学校に入学、新島襄のもとで英学を修め、1891年9月から同志社予備校の教員となった。翌年、伝道活動に身を投じるために一旦教壇を去るも、1904年に再び同志社に戻り普通学校教師となった。1917年に中学長事務取扱となったが、同志社紛擾の渦中に退職した。1920年に南部バプテスト派宣教師E. N. ウォーン (Walne) の紹介をうけて西南学院中学部の教師として赴任した後、キリスト教倫理・西洋哲学史・ドイツ語・歴史などを教えた。
 - 2 波多野の日記は、現在のところ以下の三種が残っている。
 - (i) 同志社時代に金港堂書籍「学生日記」を使用したもの（1916-18年、全4巻、16年のみ二冊あり概ね私用と校務用となっている。なお本稿では1916年の私用日記を1916a年、校務用日記を1916b年と表記している。
 - (ii) 西南学院赴任後で京都滞在時に丸善「懐中日記」を使用したもの（1925-28・1935-44年、全7巻）
 - (iii) 学期中に博文館「当用日記」を使用したもの（1930-45年、全4巻）とりわけ (iii) の日記は『無迹庵日記』と題され、「当用日記」の一日の記入欄を横に四分割し四年にわたって使用されている。15年間の学期中に書かれた日記であり、日本史上の多事多難な時期でもあったため、その内容は浩瀚である。
 - 3 紙幅の都合からすべて挙げることは不可能であるが、例えば京都大学人文科学研究所は研究プロジェクト「第一次世界大戦の総合的研究」で様々な活動を行い、その成果の一つとして2014年1月に国際ワークショップ「第一次世界大戦再考100年後の日本で考える」が開催された。

のインパクトが日本の政治・外交・社会制度に大きな影響を与えたことが次第に明らかになってきている⁴。加えて、新聞、雑誌、各地の広報誌や講演会等が大戦をどのように伝えたのかというメディア史的分析もなされるようになり、大戦が日本社会にかなり深くまで浸透した様子もわかってきた⁵。しかしながら史料的な制約から、これらの研究は社会を構成する人々がどのように大戦を受け止めたのかという問いに対して、まだ十分に答えられてはいない。第一次大戦においても有山輝雄が提唱する「下からのメディア史」⁶的検討が今後ますます重要性を増してくるであろう。

以上を踏まえると、本稿が取り扱う波多野培根が書き残した日記はまさに上記の課題を受けとめる史料として恰好の素材と言える。特に大正期の日記には大戦関連の記事に事欠かず、内容においてもまざまざと大戦の影響を見て取れる点で極めて独自性が強いのである。

筆者はかつて波多野の日記を紹介したことがあるが、その際「波多野の日記を一読すると、彼が一国民として国体を支持するキリスト者として熱心に報国に励み、戦時を肯定的に生きていたように思える」⁷と書いた上で、史料を通して見える波多野の知的活動は戦争を触媒に充実していったように思われると述べた。本稿は大正期に書かれた波多野の日記をもとに、この推測をより実証的に確かめる作業と言える。具体的には、第一次世界大戦関連の記事を紹介しつつ、彼がこの世界史的大事件に直面して、どのように知的活動をなしたのかを明らかにするものである。

(1) 戦局報道記事

波多野の日記では、戦況に関する記事が最も多い。

Skagerrak に於ける英独両艦体^(ママ)の大海戦あり、英の巡洋戦艦体^(ママ)損害夥し
(昨年一月四日、ドッガーバンクに於けて英独海戦あり)〔1916a年5月31日条〕
などあるように、ほとんどは簡単に記述される。

本日より露国西南軍の大活動開始せられ、南部波蘭及び東部ガレリヤ、ブコウイナ等にて大勝を博せり、六月末迄の捕虜に十万内外なりと云ふ〔同前6月4日条〕

4 例えば、山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『現代の起点 第一次世界大戦』全4巻、岩波書店、2014年など。

5 ヤン・シュミット「第一次大戦下日本の戦争報道と『戦後』論」『アステイオン』80号、2014年。

6 有山輝雄「下からのメディア史の試み」『メディア史研究』第33号、2013年。

7 塩野和夫『継承されるキリスト教教育—西南学院創立百年に寄せて—』九州大学出版会、2014年、266頁。

とあるように、伝聞調の記事も散見される。波多野は多くの情報を新聞に拠っており、戦況を伝える報道の多さが直接波多野の日記に反映される。これに加えて、次のような記事は特に興味深い。「攻撃開始より満四ヶ月目（百二十日?）」と題した1916年6月20日の日記は

大阪朝日新聞 〔巴里来電〕…（タイムス特電十九日発）

独軍はヴェルダンを距る四哩内に迫れり、仏軍に取りては未だ曾て経験せざる危険時期の来れりなり

『大阪朝日新聞』という出典だけでなく、配信を受けた電信会社まで記している。ちなみに「特電」とは新聞社が特派員や特別契約をして配信を受けた特別な電報通信の略語であり、「タイムス特電」はニューヨーク・タイムズ社から『大阪朝日新聞』がニュース配信を受けたことを示す。また以下のように特電名だけ記されることも多い。

九月十三日（ルーター）電報

独逸公報に依れば、一九一六年八月三十一日迄の独軍の損害左の如し
死傷数…三百三十七万六千三百三十四人（内、戦死八十万人数）

○ヴェルダン要塞の防衛司令官はペダン將軍なり

九月十三日、タイムス特電

英仏連合軍が七月一日頃勢を取りし以来（ソンム地方に於て）英仏軍は（砲二百七十門。機関砲七百門。俘虜五万人）を得たり 〔1916年9月13日条〕

大正期の波多野日記には、昭和期のものとは違って出典が示されることは少ないものの⁸、内容から判断すると『大阪朝日新聞』あるいは『大阪毎日新聞』が主な情報源であったものと考えられる。日記に出典を明示する習慣は、おそらく波多野が教師であり、歴史にも造詣が深かったことと関連があるように思われる。

ところで、波多野の日記にはしばしば簡単な述懐や彼の価値観も表われる。

ヴェルダンに於ける仏軍の大逆襲（形勢変）

仏軍はヴェルダンに迫れる独軍の陣地に大逆襲を加へ、先きに失へる諸堡壘を奪還し、且つ独兵三千五百を捕虜とせり

▽二月廿壹日、独軍、ヴェルダンの総攻撃を開始せり、仏軍善く防ぎ八ヶ月の後、独軍の羅馬尼亞方面に送兵してヴェルダン正面、手薄となれるに乗じ、仏軍は大逆襲を為して成功せるなり 〔1916年10月24日条〕

この記事は、2月21日以降のドイツとフランスの両軍で70万人以上の死傷者を出した第一次大戦下で最も激しかったものの一つ、ヴェルダンの戦いを概観するものである

8 昭和期の日記には記事の典拠や新聞スクラップの貼り付けが多数見られるようになる。

が、波多野はフランス側の視点から「大逆襲」「奪還」などと熱を帯びた書き方をしている⁹。1917年2月3日には、わざわざ朱筆でアメリカとドイツ両国の外交断絶を書き、「(大統領ウエルソンの英断)」と評価する。また「中欧同盟の一角崩壊す」では、ハンガリーとバルカン連合軍の休戦条約締結により、中欧同盟から離脱したことを「(独逸に向ての大打撃)」(1918年9月29日条)と記した。

波多野はドイツ語・哲学・歴史に精通し文化的にはドイツを敬愛していた。しかし1916年日記は書き始め頃からすでにドイツ帝国の評価に辛辣が見られ、第一次世界大戦におけるドイツ帝国のあり方には常に批判的であった。それを示す一つに、ドイツ帝国建設の45周年記念日(1916b年1月18日条)には、「独逸の五逆(此度の世界的戦乱に就て)」と以下のように分析している。すなわち「(1) 逆名(開戦の名義及び順序の倒逆)」「(2) 逆戦(作戦の倒逆。即ち東守西攻)」「(3) 逆約(条約の蹂躪、ベルギー、ルクセンブルク等の侵略)」「(4) 逆道(戦争の方法の姑息乱暴。(1) 毒瓦斯入の砲撃。潜水艇の商船撃沈) 非戦闘員を猥に殺害する事」「(5) 逆祖(祖先の国家経営の精神に背く。土耳其人との同盟。アルメニア人虐殺の傍観等)」とあったが、儒教的精神からの批判であろう。このような批判は戦局が連合国側に傾き、同盟国側が徐々に後退し、崩壊していく過程でより強くなっていく。

1918年11月3日、オーストリア＝ハンガリー帝国は10月23日にはじまったヴィットリオ・ヴェネトの戦いでイタリアに大敗し、ついに休戦条約を締結した。39年前の1879年に締結された独逸同盟が「根本的動揺」を来し、「『獨逸の運命は既に極まり、獨逸を支へたる最後の支柱は遂に倒る云々』(首相ロイド、ジョージ氏が英国外務省への巴里よりの電話)」した瞬間であった(1918年11月3日条)。また同日、ドイツでもキール軍港で水兵の暴動が起こり、「日を追ふて沿岸の諸港に伝播す、遂に一般の革命」となり、ついにドイツ帝国の崩壊が始まったのである(同日条)。そして11月11日、ドイツと連合国間で休戦条約の調印となった。この出来事を波多野は「◎世界歴史の一大事件」と記した(同日条)。

日本では早くも12日午後3時過ぎにドイツ皇帝の退位と休戦条約の締結を報じる新聞号外が連発された。その夜11時に、波多野は聖書から引用して次のような所感を記している。

①朝の子、明星よ、爾は如何にして天より隕しや、諸の国を仆し、者よ、爾は如何にして斫れて地に仆れしや(以塞亜、十四章十二)

9 波多野が読んでいたであろう『大阪毎日新聞』『大阪朝日新聞』はフランス政府発表の情報を元にドイツ軍に対する攻勢を伝える記事を書き載せたが、抑制的な書きぶりであった。

②ハレルヤ、主たる全能の神は統治め給ふ、我儕喜び楽みて神を崇めん（黙示録、十九章六、七）〔1918年11月12日条〕

波多野はドイツ帝国を墮天したルシファーになぞらえ、世界がそれを打ち倒した正義を祝福するという述懐を残している。事実14日、波多野が住んでいた京都でも「午後六時より岡崎平安神宮前の広場に於て戦勝祝賀提灯行列あり、集る者三千乃至五千」とあり、戦乱から遠く離れた日本においても皆が祝福した。波多野はドイツを「朝の子」であったルシファーに見立てたことを考えると、彼はドイツが道を誤った歴史的過程に落胆していたようにも思える。次の1918年11月19日条の記述はまさにそれを表しているのではないか。

▽独逸皇帝維廉二世、自国の強を頼みて下の大勢に逆行して猥りに洩武の師を起し、独逸と自己とを今日の悲境に陥らしめしを見て感慨已み難きものあり一詩を賦す

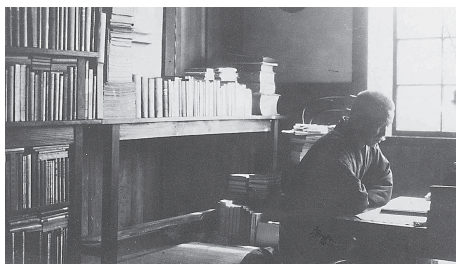
頼劍而興頼劍亡、霸囂烟散軫甚傷

驕兕不解盛衰理、恨殺当年独逸国

これに類する覚書として、波多野は大戦が終結する約10ヶ月前に「独逸の仆る、所以。（国家的無道主義）

① Selfish ② Brutal ③ Faithless」

（1917年1月3日条）と簡単に書き記していた。



西南時代の波多野の書斎

（2）戦局報道以外の記事

波多野は戦局報道を熱心に追っていたが、そこから戦争の背後にある社会にも目を向けるようになる。以下でいくつか紹介しよう。

オーストリア首相カール・フォン・シュテュルク暗殺と実行犯フリードリヒ・アドラーがオーストリア社会民主党の機関誌「カンフ」の主筆であったこと（1916a年10月21日条）、ポーランド王国の独立宣言（同11月6日条）などを記した。トルコによるアルメニア人虐殺に憤っていたのであろう、先述した通り、ドイツがトルコと同盟を結んだことを「逆祖」と書いていた波多野は、小アジア・シバズ市で起きた約5千人の虐殺事件についても触れている（1916a年11月23日条）¹⁰。

10 なおこれは『大阪毎日新聞』1916年2月25日付記事をほとんどそのまま引用したものである。

ヨーロッパ諸国の政治体制の変化にも敏感で、イギリスに「軍国内閣成る」として首相にロイド・ジョージが就任したこと（1916年12月10日条）、フランスでブリアンを首相とする改造内閣の成立について（同前12月11日および13日条）、ハンガリーにおける独立主義者と社会民主主義者による革命と共和政体の誕生（1918年11月1日条）などを記した。

波多野はこうした記事だけに止まらず、戦争を支える制度についても関心を広げていった。例えば、次の記事は第一次世界大戦における戦費の比較をしたものである（1917年7月31日条）。

此頃、英国一日の戦費

七百二十八万磅（七千二百八十万円）

独逸一日の戦費

四百七十八万磅（四千七百八十万円）

今日迄の戦費合計

英国…四百四十八億円

独逸…三百八十億円

日本の青島戦及び其後の海軍費用

約二億二千六百万円（英国の三日分余）

1917年日記の巻末には、英国の農産物と徴兵制度について調べた結果を覚書きしている。前者については、国内生産額と輸入額を調べ、1870年、1880年、1914年と推移するにつれ、英国において農産物の自給率が低下していることを記した。また後者については、元来英国軍は国防の本位を海軍に置き、陸軍を重要視していなかったことを「本国防衛兵」「正規兵」の数で示し、大戦後にはやむをえず1916年1月に部分的徴兵制度が導入され、同年5月に完全徴兵制度を施行し、所要の兵員を得るようになったことを記している。

1918年日記の巻末では、英国の教育法令に関して以下のようにまとめた。

英国の新教育会（一九一八年の教育法令）

文相、フィッシャー氏はロイド、ジョージ氏に選抜せられて文相となる

新教育会（一九一七年八月十日、衆議院へ提出。一九一八年八月八日裁可）

（備考）①一九〇二年の教育法令（バルフォア内閣の時）

②一八七〇年の教育法令（第一回グラッドストーン内閣の時）

▽新法案の主旨

五歳から十四歳迄の強制学校教育を大に振興せらると同時に十五歳から十八歳迄の若年者に強制補習教育（一週八時間宛、四十週間を課す。総計三百二十時間）

- 是は独逸の驚くべき、小学卒業後の補習教育の完備と刺戟せられたものである、一般労働者等の智識と能力を進めざれば今後の世界的競争に勝利者たる能はず
- ▽労働者等も自己の子弟の教育の必要を感じ「職人教育協会」を組織し、着々議会の同意を得たるなり現に一九一六年十二月（ロイド、ジョージ内閣の）には職人教育協会が全国各地に大会を開きて教育改革の決議を為したのである
- 外に幼者労働者に対する禁止制限あり

(3) 歴史の整理とその意味

波多野は日記をつける際に、その日の過去に何があったのかを記す時がある。例えば、1916年7月28日には、2年前の同日にオーストリアとセルヴィアの国交断絶、交戦状態に入り、「(大戦乱の第一日)」とある。波多野はこうした記事を後に整理して、年表風に記述することが多い。例えば以下である。

- 奥匈国皇儲同妃、ボスニヤのサラエヴラに於て一学生青年の為に射撃せられて死す（六月二十八日。一九一四年）—大正三年
- 奥塞二国、国交断絶（七月二十五日）。
- 独逸露国に（八月一日）、露国独逸に（八月二日）に、独逸仏国に（八月三日）宣戦す。〔1918年10月31日条欄外〕

とある。また同年11月7日にも

- 普仏戦争（一八七〇—一八七一年）に於ける仏人の元氣
- ①セダン開城後（九月二日）——ファールクの休戦講和談判
- ②メッツ開城後（十月二十七日）—チェールの
- ③巴里救援軍全敗後（一八七一年一月中旬）
- ▽巴里開城（一八七一年一月廿八日）休戦条約（三週間）
- 二月二十六日ヴェルサイユ条約（仮和約）

とある。このような整理は単に年表に止まらない。「独逸の陸軍参謀総長更迭」と題した記事では、参謀総長の変遷を次のように年表形式で整理し、ファルケンハインが更迭され、ヒンデンブルクに代わった経緯を簡単にまとめている（1916年8月30日条）。

1. Moltke（老モルトケ將軍の甥）
2. Farkenhayn —大正四年一月、モルトケに代る（普国陸軍大臣）五十五歳
3. Hindenburg —大正五年八月三十日

ファルケンハインに代る

独逸皇太子及びファルケンハイン等仏国攻撃に全力を傾注し、ベルダン要塞攻略に着手せしが、六ヶ月を経るも陥落の模様なきに羅馬尼亞、連合側に加り形勢、独逸側に非ならんとし、世間の非難甚し、ファルケンハイン其犠牲となりて免職せられしものならん（モルトケ將軍はマルヌ戦の失敗の外、英国攻撃の為めカレー方面を攻略せんとするカイゼルと意見を異にせる為めなりとの説あり）

波多野はこの参謀総長の変遷を1918年11月10日にも振り返り、さらに敗戦で退位したドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の履歴も同様に、

一九〇九年（明治四十二年）五月十四日

独帝維廉二世、維納停車場到着、フランツ、ヨゼフ老帝と同車（得意満面、肩に風を研つて）群衆の熱狂的歓迎に停車場より白羊宮に赴かる

独帝

一八五九年一月二十七日誕生

一八八八年六月十五日即位（三十才）

一九一八年十一月九日退位（六十才）

と整理して裏表紙の内側に記した。

波多野はこのような歴史の整理を何のためにおこなったのであろうか。キリスト者であり教師でもあった波多野培根は収集した情報をもとに講話したと思われる。

朝チャペルにて講話す。

英国は海を支配し、仏国は陸を支配し、独逸は空中を支配する云々。〔1917年1月17日条〕

残念ながら大戦について触れた講話をなしたという記事はこの事例一点のみである。しかしながら、昭和期になると数多くのチャペル講話、学校での朝礼や式典、授業や読書会などでたびたび戦争関連の話をしていることから、第一次大戦やそれに関連した話を題材にした各所で話した事例はもっと多かったと思われる。上述した日記巻末の戦費の比較、イギリスの徴兵令や教育法令を調べた跡は、話を作る上での覚書であったと考えられる。

おわりにかえて

最後に、これまで見てきた波多野の日記と戦争関連報道の関係について整理しておこう。

波多野の日記の特徴として、戦争とその関連記事の多さが挙げられる¹¹。本稿では

11 拙稿「資料紹介 波多野培根の日記」『西南学院史紀要』第9巻、2014年。

大正期の日記を取り上げたが、昭和期の日記はさらに戦争関連の記事は増加する。もちろん満州事変以来、日本が戦時色を強めていくことが大きな要因であるものの、実は波多野は日露戦争の時期から一貫した態度で戦争関連の情報を収集し記録していた¹²。情報のほとんどは新聞によるものであり、当メディアの影響を強く受けていたと言える。

戦争報道と新聞の関わりについて、日清日露戦争時から『近事画報』や『戦時画報』などの写真雑誌や新聞紙上で写真報道が増加する。『近事画報』の発案者である矢野竜溪は、画報というメディアを通して、人々が戦争をはじめとする世界の出来事を“目撃”し、それによって知識を増やすことを期待していたこと、報知新聞や東京朝日新聞が写真報道の先駆者であったが、以後、他紙も順次写真掲載に力を入れるようになり、明治末から大正初期にかけて、写真を含む速報体制が確立されていくことを井上祐子氏は指摘している¹³。ところが、そうした写真報道は速報性に問題があるし、写真の撮影や印刷技術による制限も多かった。

このような写真報道における技術的限界が転換したのが第一次世界大戦の時期である。各新聞社はこぞって戦地に特派員を送り、これまでに比して飛躍的に戦争報道が増加するようになる。また、メディアは開戦からおびただしい数の戦況を伝えていたが、1916年には西部戦線が停滞し、その結果戦況に変わる新しいニュースを探す必要が出てきた。それにともなって、「発見」されたのが動員を支える銃後の社会であった¹⁴。

戦争が長期化したこと、戦線が停滞したことで従来の画報などは戦場の写真や地図による戦局解説などによって占められていた紙面構成の転換を迫られた。その結果、世界情勢の分析などに紙面を割くようになり、それは戦争報道から一層離れた内容になっていく¹⁵。さらに国内メディアは海外の通信社と提携し、電報による記事配信も

12 西南学院100周年事業推進室所蔵『波多野培根〔10〕』『波多野培根〔11〕』は日露戦争以降の戦争関連記事切抜集成である。波多野は少なくとも日露戦争期から戦争関連の記事を収集していたようである。

13 井上祐子『日清・日露戦争と写真報道：戦場を駆ける写真師たち』吉川弘文館、2012年、164頁。

14 Schmidt, Jan (2013): Nach dem Krieg ist vor dem Krieg - Der Erste Weltkrieg in Japan: Medialisierte Kriegserfahrung, Nachkriegsinterdiskurs und Politik, 1914-1918/19. Unpublished doctoral dissertation, Ruhr Universitaet Bochum. (邦訳「戦後は戦前」―日本における第一次世界大戦：1914-1918/19年におけるメディアを媒介とする戦争体験と戦後言説そして政界の動向)。

15 小林啓治『総力戦とデモクラシー：第一次世界大戦・シベリア干渉戦争』吉川弘文館、2008年、96-106頁。

増大させた¹⁶。以上のように第一次世界大戦では報道が速報性を増し、そして多様化したのである。メディアが世界により近接し、彼らの関心を拡大させた結果でもあるが、それは読者にとっても同様であったと言える。

このようにメディアの戦争報道様式の変遷を概観してみると、波多野の日記はそれを如実に反映しているように思われる。すなわち、戦争関連の記事を書き留め続けた波多野は、戦争から世界への興味を広げていったが、それはまさにメディアによって惹起され、メディアに同調するかたちでなされたのである。波多野はメディアにとって模範的な情報の受け手であったと言えるが、それは波多野が新聞や雑誌を丹念に読む知識人であるが故に強い影響を受けたためとも言える。ただし、このような波多野の態度は自己批判なく形成されたわけではなく、「世界の様々な事象を、自己にとっての意味として再構成し、人格を高めていく」大正教養主義¹⁷の影響があったことも、彼の日記から読み取れるのである。

本稿では紙幅の都合で触れることができなかったが、波多野は昭和期においてますます彼の知的活動を、戦争（報道）を媒介に充実させていく。ここで紹介した第一次大戦の記事と昭和期の日記を併せてみてみれば、波多野の思考様式から戦争を切り離すのはますます困難に思われる。

波多野は自己を取り巻く世界についての知識と理解を、キリスト者として真摯に聖書の教えに向き合い、先哲と対話し、常によりよい解釈と教授法を求める態度と接続させる努力も怠らなかった¹⁸。このような知的態度が土台にあってこそ、彼の知的活動は戦争を触媒に充実していったと言える。繰り返しになるが、波多野の日記は、人がいかにして知識を獲得し、その世界（観）が変動するかという知的営為をまざまざと見せてくれるのである。

これは、2013年12月19日と2014年3月17日に行われた第4回・第5回百年史研究会で発表した内容をもとにして、紀要に掲載するために改めて執筆を依頼した原稿である。

16 例えば、1906年には海底ケーブルの開通がなされ、また1923年には報道通信用無線電信が開始された。詳しくは片山正彦「通信社の役割—知られざる報道メディアの中核」（『メディアと文化』第2号、2006年）を参照のこと。

17 山口輝臣編『日記に読む近代3 大正』吉川弘文館、2012年、11頁。

18 前掲拙稿、110頁。